

## 後鳥羽院の『遠島御歌合』『忍恋』題歌について

渡 辺 健

一  
手をたゆみおさふる袖も色に出でぬ稀なる夢の契りばかりに<sup>(1)</sup>

出典は嘉禎二年(一二三六)七月『遠島御歌合』四十九番左、「忍恋」題で詠まれた歌である。この歌は同歌合では、

四十九番 忍恋 左持 女房<sup>(2)</sup>

手をたゆみおさふる袖も色に出でぬ稀なる夢の契りばかりに

右 家隆

忍び音も声立てつべし枕より後より恋のせめて憂きころ

左歌、させる事なく見ゆ。右歌は、俳諧歌の中に待れども、「後より恋のせめて憂きころ」といへる、をかしく

見ゆ。しかれども、左もことなる難なくは、持と申すべし。

と、藤原家隆の歌と番えられて持となっている。後鳥羽院の判詞では、自歌をあまり評価していないようであるが、院は自分が判者となった時には、臣下に対しても謙退の姿勢をとるのが通例であるため、判詞にいつていることを顔面通りに受け取ることとはで

きない。院はむしろ、『遠島御歌合』の自詠十首には並々ならぬ自負の念を抱いていたと思われるのだが、番いの相手となった家隆の顔を立てて、一首しか自歌に勝を与えていない。家隆は『遠島御歌合』の翌年、八十歳で亡くなることもあり、この歌合の十首を見ても、作歌の力量の衰えは歴然としていることを考えると、院が家隆に勝三・持六・負一の成績を与えたことには、院の家隆に対する優遇と共に、評価に際しての苦心の程もしのばれるのである。話題がやや逸れたようだが、院の判詞にいう所と、院の実際の自歌に対する評価には懸隔がある可能性を考慮すべきことを指摘しておきたい。

この歌については、寺島恒世氏と樋口芳麻呂氏が、それぞれ論文・著書の中で触れておられるので、まずそれを引用しておく。

寺島恒世氏<sup>(3)</sup>

手をたゆみをさふる袖も色に出ぬまれなる夢の契りばかりに

りに (四十九番 忍恋)

という一首も、源氏物語の、

とがむなよ忍びに絞る手もたゆみ今日あらはるる袖のしづくを (藤裏葉)

を本歌として王朝物語世界を背後に描曳させ、

夢の中にあふと見えつる寝覚めこそつれなきよりも袖は

濡れけれ (新古今集・恋二・一二七 実宗)

などにも触発されて、堪え切れなくなつた一瞬が、実は夢で

会うと見た幻想に依るものだったという「忍恋」の極限状態

を歌った、題に沿う題詠歌である。

樋口芳麻呂氏

「手をたゆみ」の詠は、嘉禎二年、『遠鳥歌合』四十九番左

の「忍恋」の作である。「手がだるくなるので、血涙をおさ

え隠している袖も、色にあらわれてしまった。逢う夜のまれ

な夢のような契りばかりで」の意。『源氏物語』『若紫』の巻

で、光源氏が詠んだ藤室女御への恋の歌、

見てもまた逢ふよまれなる夢のうちにやがてまぎるるわ

が身ともがな

をふまえてゐる。

見て分るように、寺島氏と樋口氏とは指摘する本歌も違い、「忍

恋」の極限状態を歌った「作と見、また「逢う夜のまれな夢のよ

うな契り」を歌った作と見るそれぞれの一首に対する理解にも相

違があるようである。そこで以下、両氏の見解のうちどちらが妥

当かも含めて、「手をたゆみ」の歌について改めて検討を加えて

いきたい。その際の手続きとしては、まず後鳥羽院が「忍恋」という題意をどのように把握していたかを考察し、次にこの歌を構成する、「袖の紅涙」「おさふる袖」「手をたゆみ」「夢の契り」という各要素について分析し、最後にこの歌の本説について言及したいと考えている。

## 二

この節では、「手をたゆみ」の歌を詠む際に、後鳥羽院が「忍恋」という題意をどのように捉え、形象化しようとしていたのかについて考察する。ここでもまず、後藤様子氏がいわれるように、「忍歌は基本的に、恋愛の前半状態、いわゆる初会前の男の恋歌と後半の女の恨み歌から成る」こと、「平安和歌の現存資料に關する限り、「忍恋」は「恋の相手に我が思いを秘めて明かさないことであつて、既に相愛の男女が人目を忍んで恋しあうことではない」こと、を確認しておく。したがつて、後鳥羽院が「手をたゆみ」の歌の中に設定した主体は男であり、この歌は男性恋歌であることを前提として以下の作業を進める。

後鳥羽院が「忍恋」の題意をどのように把握していたかについては、この歌の第三句「色に出でぬ」が鍵となる。小町谷照彦氏がいわれるように、「色に出づ」は忍恋の表現類型であり、「森情が相手に伝わらないことを嘆きながら、恋の苦悩にひたすら堪え忍ぶ」が、「その忍耐が限界に達した時に恋の思いが顔色や態

度に表れる」歌が詠まれるものである。

「色に出づ」の表現類型を踏まえた作としては、

人知れず思へば苦し紅の末摘花の色に出でなむ（古今集・恋  
一・四九六・よみ人しらず）

思ふには忍ぶることぞ負けにける色には出でじと思ひしもの  
を（同・恋一・五〇三・よみ人しらず）

紅の色には出でじ隠れ沼の下にかよひて恋ひは死ぬとも

（同・恋三・六六一・紀友則）

我が恋を忍びかねてはあしひきの山橘の色に出でぬべし

（同・恋三・六六八・紀友則）

嘆きあまりつひに色にぞ出でぬべき言はぬを人の知らばこそ

あらめ（拾遺集・恋一・六二五・よみ人しらず）

のような例もあるが、何といつても有名なのは、後に『百人一首』  
に採られて人口に膾炙した、

忍ぶれど色に出でにけり我が恋は物や思ふと人の問ふまで

（拾遺集・恋一・六二二・平兼盛）

であろう。「忍恋」の題から、院がまず直観的に思い浮かべたの  
はこの歌だったはずであり、またその派生歌であったのではない  
か。「忍ぶれど」の歌は『拾遺抄』『拾遺集』に入集しており、藤  
原公任の『金玉集』『深窓秘抄』等の秀歌選には採られていない  
ものの、『天徳四年内裏歌合』における忠見・兼盛の勝敗に関す  
る逸話に興味を持たれたためか、『俊賴髓脳』『和歌童蒙抄』・奥

儀抄』『袋草子』等、院政期の歌学書にしばしば取り上げられて  
いる。藤原俊成『古来風体抄』・藤原定家『定家八代抄』『百人  
秀歌』『百人一首』・後鳥羽院『時代不同歌合』にも選ばれている。  
こうした評価の高さを裏付けるように、新古今時代には「忍ぶ  
れど」の被影響歌が数多く見出される。

①袖の色は人の問ふまでなりもせよ深き思ひを君し頼まば（千

載集・恋二・七四五・式子内親王）

②空蟬の鳴く音やよそにもりの露ほしあへぬ袖を人の問ふまで

（新古今集・恋一・一〇三一・藤原良経）

③いはぬより心やゆきてしるべするながむるかたを人の問ふま

で（同・恋二・一一〇五・藤原隆房）

④今はただ袖の涙を色に出でて物や思ふと人に問はれん（拾玉

集・宇治山百首・忍恋・一〇七五）

⑤我が恋は色に出でぬべし誰かまた物や思ふと問はんとすらむ

（建仁元年四月鳥羽殿影供歌合・忍恋・四五・藤原公継）

⑥ながむるに物や思ふと夕暮の間はぬ空にも忍ぶころかな

（同・忍恋・四七・源家長）

⑦今はまた物や思ふと問はれぬも忍ぶあまりは苦しかりけり

（同・忍恋・五四・源具親）

⑧嘆きあまり物や思ふと我が問へばまづ知る袖の濡れてこたふ  
る（後鳥羽院御集・建仁二年六月水無瀬釣殿歌合・忍恋・一

五八七）

⑨ 秋なればとてこそ濡らす袖の上を物や思ふと月はとひけり

(秋篠月清集・八四四／千五百番歌合・秋二・一三三二)

⑩ 忍ぶれど色にや出づる女郎花物や思ふと露のおくまで (千五

百番歌合・秋一・一一九六・源具親)

⑪ まだ知らぬながめは今宵いつかまた物や思ふと人に問はれん

(建仁元年八月和歌所影供歌合・初恋・一五六・宮内卿)

右の用例のうち、①②④⑧⑨は、「忍ぶれど」の歌を踏まえつ

つ涙に濡れる袖を詠んだものであるが、特に①式子内親王・④慈  
円の歌は、忍ぶ恋心が袖の紅涙によって、露見する発想によるも  
のと思われる点、注目に値する。後鳥羽院は問題の歌を詠むに際  
して、「忍恋」の題で詠むべき感情のありかたを「忍ぶれど」の

歌あたりに定め、次に歌の構想を具体化していく段階で念頭に置  
いていたのが、これらの歌だったと思われる。

### 三

ここで、袖の紅涙について説明を加えておく。

君恋ふと涙に濡るる我が袖と秋の紅葉といづれまされり (後

撰集・秋下・四二七・源整)

紅に袖をのみこそ染めてけれ君を恨むる涙かかりて (同・恋

四・八一〇・よみ人しらす)

忍ぶれど涙ぞしるき紅に物思ふ袖は染むべかりけり (詞花

集・恋上・二一九・源道濟)

紅にしをれし袖も朽ちはてぬあらばや人に色も見すべき (千  
載集・恋三・八三二・皇太后宮若水)

袖を染める紅涙のイメージを詠むのは、八代集でいえば『後撰集』

から増えてくる和歌の表現類型である。主に恋歌において、激し  
い悲嘆のあまりに流すという血の涙を、優美な感覚で詠んでいる。

新古今時代には、

我が恋は真木の下葉にもる時雨濡るとも袖の色に出でめや

(新古今集・恋一・一〇二九・後鳥羽院)

よそながらあやしとだにも思へかし恋せぬ人の袖の色かは

(同・恋二・一一二一・高松院右衛門佐)

白樺の袖の別れに露落ちて身にしむ色の秋風ぞ吹く (同・恋

五・一三三六・藤原定家)

野辺の露は色もなくてやこぼれつる袖よりすぐる萩の上風

(同・恋五・一三三八・慈円)

というように、直接紅涙といわずして、袖の紅涙を詠む歌が多く  
見られるようになる。後鳥羽院が『詠五百首和歌』(隠岐での作)

「恋百首」で、

せきかへしなほも色にぞ出でにける思ひによる袖のしがら

み (後鳥羽院御集・九〇四)

忘れゆく人の心を嘆く間にわが袖さへも色変はりけり (同・

九九九)

等と詠んでいるのも、この類型を踏んだものである。後鳥羽院は、

これらの類型を詠歌の前提として、忍ぶ恋のあまり袖の紅涙に思いがあらわれてしまったという、この歌の上句の部分を構想したのである。

次に問題となるのは、それを表現するためにどのような詞を選択し、結合したかであるが、院はまず初句に「手をたゆみ」という用例数の稀少な歌句を用いている。これは先に寺島恒世氏が指摘されていたように、『源氏物語』の、

とがむなよ忍びにしほる手もたゆみ今日あらはるる袖のしづくを

から取ったのであろう。ただし、寺島氏がいわれるように、この歌を本歌と認定してよいかについては少々疑問がある。

この歌は、『藤裏葉』巻で内大臣に雲居雁との結婚を許された夕霧が詠んだ歌で、「涙に濡れたわが袖を、人目につかぬよう絞っていた手もだるくなったので、今日は絞らず、外に表れた私の袖の涙をどうか咎めないでください」の意である。以前は、仲を隔てられた叶わぬ恋ゆえ、人目を憚りつつ涙で袖を濡らしていたが、今は結婚を許されて人目もつつまず、嬉し涙が袖の雫となつていることを詠んでいるのであるから、問題の歌の内容とはやや径庭があるように思われる。院は『詠五百首和歌』『恋百首』でも、恋衣しほる涙の手をたゆみしほしたゆまん袖の間もがな（後

鳥羽院御集・九七七）

という被影響歌を詠んでいるから、この歌を好んでいたのである

うが、詞の撰取と本歌取との間には、表現の位相差があると思うので、参考歌という程度に考えておきたい。

次に、問題の歌の第二句の「押さふる袖」は、恋歌においてしばしば用いられた詞であり、恋の苦悩や悲嘆のあまり流す涙を、袖で押さえとめるという内容が詠まれる。

限りぞと思ふに尽きぬ涙かな押さふる袖も朽ちぬばかりに

（後拾遺集・恋四・八二八・盛少将）

恋ひわびて押さふる袖や流れ出づる涙の川の堰なるらん（金葉集・恋上・三七五・藤原道経）

あさましや押さふる袖の下くぐる涙の末を人や見つらん（千載集・恋一・六九三・源頼政）

今はただ押さふる袖も朽ちはてて心のままに落つる涙か（同・恋五・九四〇・藤原季通）

忍びあまり落つる涙をせきかへし押さふる袖も憂き名もらすな（新古今集・恋二・一一二・よみ人しらず）

いかにせん押さふる袖も朽ちはててかかるかたなく落つる涙を（月詣集・四月附恋上・三八〇・成金法師）

我とは思ふにかかる涙こそ押さふる袖の下になりぬれ（拾玉集・一六二／六百番歌合・恋上・十一番右・忍恋・六二二）

涙塩焼く海人の袂衣をさあらみ押さふる袖にもる涙かな

（壬二集・一四九四／洞院撰政家百首・忍恋・一〇二七）

右の用例の中では、寺島氏も指摘されていた『新古今集』恋二の「忍びあまり」の歌は、後鳥羽院も当然承知していたものと思われる。だが、問題の歌を詠む際に院の念頭に強くあつたのは、次のような「押さふる袖」と「袖の紅涙」とが結びついた用例であつたと思われる。

つれなくて押さふる袖の紅にまばゆきまでになりけるかな

（増基法師集・三六）

思ひあまり落つる涙を忍ぶれど押さふる袖の色に出でぬる

（六条修理大夫集・一二一）

泣く涙押さふる袖は紅に色このみとや人は見ゆらん（散木奇

歌集・恋下・一二〇六）

この中では、二首目の「思ひあまり」の歌が、問題の歌の上句における表現に近い。後鳥羽院はおそらく問題の歌の上句において、この歌の表現に『源氏物語』の「とがむなよ」歌の第三句を取り合わせるような形で、「人目を憚って、忍ぶ恋の苦惱ゆえ泣く涙を、袖で押さえとめていたが、その手もだるくなり、顔から袖を離したので、紅涙に染まった袖の色があらわれてしまったよ」という複雑な内容を、巧みに統辞化したものと考えられる。

#### 四

この節では、問題の歌の下句の検討に移る。「稀なる夢の契りばかりに」という措辞には、樋口芳麻呂氏が指摘されていた、『源

氏物語』「若紫」光源氏の、

見てもまた逢ふ夜稀なる夢のうちにやがてまぎるるわが身ともがな

の影響が考えられてよい。この歌を含む「若紫」の一場面を次に引用しておく。<sup>10)</sup>

藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかでたまへり。上（桐壺帝）のおほつかながり嘆ききこえたまふ御気色も、（源氏ハ）いといとはしう見たてまつりながら、かかるをりだにと、心もあくがれまどひて、いづくにもいづくにも参うでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩きたまふ。いかたばかりけむ、いとわりなくて見たてまつるほどさへ、現とはおほえぬぞわびしきや。宮もあさましかりしを思し出づるだに、世ととももの御もの思ひなるを、さてだにやみなむ、と深う思したるに、いとうくて、いみじき御気色なるものから、なつかしうらうたげに、ざりとてうちとけず、心深う恥づかしげなる御もてなしなどの、なほ人に似させたまはぬを、などかなのめなることだにうちまじりたまはざりけむ、とつらうさへぞ思さるる。何ごとをかは聞こえつくしたまはむ。くらぶの山に宿も取らまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさまじうなかなかなり。

見てもまたあふまれなる夢の中にやがてまぎるるわが



身ともがな

とむせかへりたまふさまも、さすがにしみじければ、

世がたりに人や伝へたぐひなく、つき身を醒めぬ夢になしても

周知のように、この場面は源氏と藤壺とのほかない一夜の逢瀬を描いており、『源氏物語』中でも屈指の名場面といつてよい。

後鳥羽院の好んでいた場面でもあったらしく、『詠五百首和歌』『恋百首』には、

逢ひ見ても夢かと思ふうたがひにうつつながらもなほやうらみん（後鳥羽院御集・九二二）

思へただ逢ふ夜種なる明けくれに露きえわびし人の面影（同・九五二）

という歌がある。

『見てもまた』の歌は、藤原定家が建久年間に撰したと考えられている『物語二百番歌合』の冒頭に置かれた歌であり、その意味でも後鳥羽院にはなじみの深い歌であったように思われる。院が問題の歌を詠む際に、『源氏物語』の『見てもまた』歌とその場面とを念頭に置いていた可能性は、詞遣いの親近性という点からも、認められてよいと思われる。

## 五

ただしここで問題となるのは、『見てもまた』の歌は、光源氏

が藤壺を激しく思慕するあまり、王命婦に手引きさせ密通して逢瀬を遂げるといふ場面で詠まれた歌であり、『手をたゆみ』の歌が「忍恋」題で詠まれていることと抵触するのではないかということである。後藤祥子氏が述べられていたように、忍恋は「恋」の相手に我が思いを秘めて明かさなないことであつて、既に相愛の男女が人目を忍んで恋しあうのでない」のであるから、この歌の下句を、樋口芳麻呂氏のように「逢う夜のまねな夢のような契りばかりで」と訳し、恋の渦中にある段階の歌として理解するのは、院がこの歌を詠んだ意図とは相違しているのではないかと思われるのである。

これは結局、第四―五句の「夢の契り」をどう考えるかという問題につながると思つので、次に「夢の契り」の用例を掲げておく。

① わかかぬる夢の契りに似たるかな夕べの空にまがふかげろふ（拾遺愚草・七七六・建久二年十題百首・虫）

② 明けぬとてはかなくしのぶ名残かな逢ふとしもなき夢の契りを（隆信集・恋三・五五三／千五百番歌合・恋二・二五〇八）

③ 寝る夜なき心のどかに年を経て夢の契りも幾夜へだてつ（後鳥羽院御集・九六五・詠五百首和歌・恋百首）

④ 人はよもさむる名残も惜しからじ心かよはぬ夢の契りは（続千載集・恋三・一三三五・前大僧正実題）

⑤ 稀に見し夢の契りも絶えにけり寝ぬ夜や人のつらさなるらん（同・恋四・一五二五・平貞資）

⑥曉を憂きものとだに知らざりき枕さだめぬ夢の契りは（風雅集・恋二・一一二〇・従三位容子）

⑦憂きふしとかなかなかなりぬ笹枕結ぶ一夜の夢の契りは（新拾遺集・恋三・一一六九・よみ人しらす）

⑧はかなしや我が思ひ寝の心よりかよふ直路の夢の契りは（新後拾遺集・恋二・一〇二〇・善為法師）

右の用例の意味をそれぞれ考えてみると、①夕べの空にまぎれてしまふようなかげろうのはかなさは、現実のことと区別したい、夢の中の契りに似ている。②夜が明けたといって、違ったとはいえない、夢の中の契りの名残をはかなくなつたかしむことであるよ。③心のどかに眠る夜もなく年月が経って、夢の中の契りもなくなつて幾晩が過ぎたことであらうか。④現実の逢瀬とは違つて、心の通わない夢の中の契りなので、あの人はまさか夢の醒めた後の名残を惜しいとは思ふまいよ。⑤稀に逢つていた夢の中で逢瀬も途絶えてしまった。眠らない夜はあのひとと夢の中で逢うことも叶わないのだから、現実にあの人がつれなくて逢瀬を遂げられないのと似ていることよ。⑥恋しい人が夢に現れる枕の向きを定めかねて、夢の中の契りが叶わなかったので、夢が醒めて恋人と別れなければならぬ曉も、今朝はつらいとも思わなかった。⑦旅寝の一夜、夢の中で契りを交したのは、（都に残してきた妻のことが気がかりで）かえつてつらいことになつてしまったよ。⑧私があの人を思つて寝た夢では、あの人のも

とへ行く道はまっすぐに通じていたが、それは私の心から行き来る道に過ぎず、夢の中の契りでしかないのははかないことだ。

以上のように、「夢の契り」の用例を検討すると、全て「夢の中の契り」の意味であつて「夢のような契り」の意味ではなく、したがつて現実に男女が契りを交しているわけではない。右の⑧の用例は、

恋ひわびてうち寝る中に行きかよふ夢の直路はうつつならなむ（古今集・恋二・五五八・藤原敏行）

を踏まえていたが、「夢の契り」を詠んだ歌も基本的にはこの歌の線に沿つて理解すべきであらうと思われる。

それゆゑ、問題の歌の「稀なる夢の契りばかりに」は、「源氏物語」「若紫」の例の場面における光源氏の歌を踏まえつつ、源氏と藤壺との「夢のような契り」ではなく、「夢の中の契り」を表現していることになり、そこに後鳥羽院の創意もあつたように思量される。本歌は、光源氏が藤壺と密通した際のやるせない心情を詠んだものであつたが、後鳥羽院は本歌の詞を取りつつ、源氏の藤壺への現世では成就しがたい、忍ぶ恋の思いを歌つた作として創造したと考えられるのである。

稿者が第二・三節で考察したように、問題の歌の上句においては、思ひの露見を避けようと涙を袖で押さえるけれども、隠しきれずに紅涙の袖があらわれてしまふ、というほどの痛切な忍ぶ恋の心情が歌われていた。これは、父帝の寵愛する妃を思慕すると



いう禁忌の恋に懊悩する光源氏の姿であり、藤壺との逢瀬を求めて恋い焦がれるゆえに夢の中で稀に契りを交すが、それは現実ではないため、いつそう苦悶して、押さえていた袖の涙も紅に色変つてゆく。と、後鳥羽院はおそらくこのようなイメージを形象化しようとしていたように思われる。

『遠鳥御歌合』では、後鳥羽院はみずから謙退してこの歌を持としたが、実際には、平明優美な歌のように見えながら表現に工夫を凝らし、物語の作中歌とその場面を踏まえつつそこに想像力を加えて再構成したこの歌は、院にとつてかなりの自信作であつたに相違ない。院が『時代不同歌合』後稿本の一本において、この歌をみずからの代表歌三首の中に選んでいるのも、やはり自負の念によるものと思われるのである。

後鳥羽院が『遠鳥御歌合』の歌を詠み判を付した嘉禄期（一二三五—一七）に、『時代不同歌合』詠五百首和歌『隠岐本新古今集』等、院が多数の和歌活動を集中的に行つたことはよく知られている。その『隠岐本新古今集』の跋文で院は、「おほよそ玉のうてな風やはらかなりし昔は、なほ野辺の草しげきことわざにもまぎれき。いさこの門月静かなる今は、かへりて森の梢深き色をわきまへつべし」と、出家し閑静な環境で暮らす今は、昔の都時代よりも和歌の鑑賞眼がいつそう充実してきたと語っている。「手をとみ」の歌は、そうした隠岐晩年の後鳥羽院の、歌境の深化を窺わせる作であるように思われる。

# 注

(1) 以下、本稿において勅撰集・私家集・定数歌・歌合等の本文の引用は、『新編国歌大観』に依つたが、読解の便宜を考慮して表記を私に改めた。

(2) 『遠鳥御歌合』は嘉禄二年七月、隠岐の後鳥羽院が、いまだ京にあつて院を慕う歌人達十五人から各十題十首を召し、院自身の十首と合わせて八十番の歌合に番えたもの。判詞は院の執筆。題は、朝霞・山桜・郭公・萩露・夜鹿・時雨・忍恋・久恋・羈旅・山家の十題。四季六・恋二・雜二という構成である。

(3) 「女房」は後鳥羽院の隠名。

(4) 『古今集』雑体・俳諧歌・一〇二三番、よみ人しらず「枕より後より恋のせめくればせむ方なみぞ床中にをる」をさす。

(5) 寺島恒世氏「後鳥羽院隠岐の歌―『自歌合』、『遠鳥御歌合』にふれて―」（『国語と国文学』第五五巻第七号、昭和五三年七月）

(6) 樋口芳麻呂氏「後鳥羽院」（王朝の歌人一〇集英社、昭和六〇年一月）

(7) 後藤祥子氏「女装する定家」（『文学』第六巻第四号、平成七年一〇月）

(8) 同氏「女流による男歌―式子内親王歌への一視点」（関根慶子博士頌賀会編『平安文学論集』風間書房、平成四年一〇月）  
久富木原玲編『日本文学を読みかえる3和歌とは何か』有精堂、平成八年六月）

(9) 小町谷照彦氏「古今和歌集と歌ことば表現」（岩波書店、平

成六年一〇月)

(10) 『源氏物語』の本文には、小学館日本古典文学全集本を用いるが、読解の便宜を考慮して、括弧内に適語を補うなどした。

(わたなべ けん 岡山大学大学院文化科学研究科)

研究室受贈圖書雑誌目録Ⅶ

二松 (二松学舎大学大学院文学研究科) 十五

二松学舎大学 人文論叢 (二松学舎大学人文学会) 六七

日文諸究 (群馬県立女子大学大学院文学研究科日本文学専攻)

三

日本漢学研究 (慶応義塾大学文学部 佐藤道生) 三

日本近代文学と家族 研究プロジェクト報告書 (千葉大学大学院

社会文化科学研究科) 二

日本研究教育年報 (東京外国語大学日本課程・留学生課共編)

五

日本言語文化研究 (龍谷大学日本言語文化研究会) 三

日本語学文学 (三重大学) 十二

日本語と日本文学 (筑波大学国語国文学会) 三三、三三三

日本語日本文学 (創価大学日本語日本文学会) 十一

日本語日本文学 (同志社女子大学日本語日本文学会) 十三

日本語日本文学 (輔仁大学外語學院日本語文學系) 二五、二六

日本文学会研究報告 (盛岡大学文学部日本文学科) 九

日本文学会誌 (盛岡大学文学部日本文学科) 十三

日本文学紀要 (昭和女子大学) 十二

日本文学研究 (大東文化大学日本文学会) 四十

日本文学研究 (梅光女学院大学日本文学会) 三六

日本文学研究年誌 (金沢学院大学日本文学研究室) 十

日本文学ノート (宮城学院女子大学日本文学会) 三六

日本文学論集 (大東文化大学大学院日本文学専攻院生会) 二五

日本文化論叢 (愛知教育大学日本文化研究室) 九

日本文藝研究 (関西学院大学日本文学会) 五二、四、五三一、

二

日本文芸論叢 (東北大学文学部国文学研究室) 十三・十四合併

号

日本文学論究 (國學院大學國文学會) 六十

ノートルダム消心女子大学紀要 日本語・日本文学編 (ノートル

ダム消心女子大学) 二五一

梅花日文論叢 (梅花女子大学大学院) 九

博士学位論文 (武庫川女子大学) 十一

弘学大語文 (弘前学院大学国語国文学会) 二六、二七

広島女学院大学 日本文学 (広島女学院大学日本語日本文学科)

十一